

年度末報告書(実行団体)

- 提出日 : 2022年4月15日
- 事業名 : Change Maker Study Program～地域社会を担ってきた住民と外部の大学生の交流による地域活性化事業～
- 資金分配団体 : 一般社団法人RCF
- 実行団体 : 特定非営利活動法人SET

① 実績値

【資金支援】

アウトプット	指標	目標値	達成時期	現在の指標の達成状況	進捗状況*
1度CMSPにより訪れた若者が、継続的に地域に関われる状態	CMSP参加者の内、 ・次期CMSP運営スタッフ割合 ・上記以外で地域で活動する割合	CMSP参加者の内、 ・次期プログラムスタッフ割合が4割 ・上記以外で継続的に地域で活動する人が2割いることを目指す。	2022年 4月	<2021/4～2022/3> CMSP参加者の内、 ・次期CMSP運営スタッフ割合:3割 ・上記以外の地域で活動する割合:0割	3
地域の中で地域外から来る学生と交流しCMSPで活動してくれる人が地域の中に増える状態	CMSPの活動に関わる地域住民の人数	CMSPの活動に関わる地域の人が、プログラム実施地域(現状広田、小友、矢作)の人口の1割=10%を超える。 ※人口は広田町約3000人、小友町約1900人、矢作町約1400人	2022年 10月	2021/4～2022/3で実施したプログラムに関わった住民の数 ・広田町:17人、0.5% ・小友町:18人、0.2% ・矢作町:17人、1.2% ※上記の人数は「直接的に交流できた町の方」であり、「間接的に影響を及ぼす町の方」は未換算。事業の発展のためにも、関わる地域住民の間接的影響を含めたプログラム設計を行いたい	3
地域内経済循環を生み出すための取り組みが、関係人口(地域外の若者)などと連携しながら生まれ始めている状態。	CMSPを通して生まれる、資金の流れを地域内で循環させる取り組み数	CMSPを通して生まれる、資金の流れを地域内で循環させる取り組み数が、広田で3つ以上生まれている。	2022年 10月	資金の流れを地域内で循環させる取り組み数は0	3

* 進捗状況: 1計画より進んでいる、2計画どおり進んでいる、3計画より遅れている、4その他

② 事業進捗に関する報告

1.事業計画に掲げた短期アウトカムの達成の見込み
3.課題がある
2.アウトカムの状況
A: 変更項目 <input type="checkbox"/> 変更なし <input checked="" type="checkbox"/> 短期アウトカムの内容 <input type="checkbox"/> 短期アウトカムの表現 <input checked="" type="checkbox"/> 短期アウトカムの指標 <input type="checkbox"/> アウトカムの目標値
3. 活動に関する報告
<p>■事業の目的</p> <p>本事業は、陸前高田市において、地域内外の地域の担い手が増え、協力するコミュニティが形成された地域・社会を実現することである。広田町では地域の持続可能性を高めるためにコミュニティビジネスを仕組み化し、小友町・矢作町では継続的に地域外の若者が訪れ、交流による住民同士のコミュニケーションが増加することで継続的な住民主体の活動が生まれ、活動する人同士のコミュニティが形成されている状態を目指す。</p> <p>■2021年度の進捗状況</p> <p>事業目的の達成に向けて、「地域コミュニティや地域の課題に対し継続的に関わる関係人口(地域外の若者)が生まれる土台ができる状態」「地域のためを思って、主体的に地域内で活動する人が増える状態」「地域の持続可能性を高めるための取り組みが実装されて、地域の中でお金が巡る状態」という3つの短期アウトカムを設定し取り組んだ。</p>

□アウトプット1:1度CMSPにより訪れた若者が、継続的に地域に関われる状態

1. 目指す成果と目標値について

「1度CMSPにより訪れた若者が、継続的に地域に関われる状態」の実現にむけて、目標として「CMSP参加者の内、次期プログラムスタッフが4割、スタッフ以外で継続的に地域で活動する人が2割いる」ことを目指した。

今まで、CMSPに参加する陸前高田市の関係人口となる選択肢には運営学生スタッフしかなく、例年だと約3割の大学生が継続し、約7割の学生とは継続的な関わり方を見出せていなかった。よって、今年度より休眠預金を活用し、地域コーディネーターを設置して、運営学生スタッフ及びプログラム参加学生と継続的な面談を行い、プログラムの継続率を3割から4割に上げることを目指した。また、CMSPの運営スタッフ以外の選択肢を創り出し、適切なマッチングを行うことで、今までよりも広く、多様な関わり方の創出を目指した。

2. 実績とその要因について(※1.実績値「進捗状況」の説明)

2022年4月までに「CMSP参加者の内、次期CMSP運営スタッフ割合4割、上記以外の地域で活動する割合2割」と設定したが、現在「CMSP参加者の内、次期CMSP運営スタッフ割合3割(※2021年夏季のプログラム後、2022年春季の運営スタッフになった継続率)、上記以外の地域で活動する割合0割(※2022年春季のプログラム後の継続率は今年の6月に確定)」と計画より遅れている状況である。

要因として、「次期CMSP運営スタッフ割合」については、例年の参加者の参加動機は「挑戦したい」「仲間が欲しい」というものがあり、スタッフの参加動機になると、地域との継続的な関わりなども含まれるが、活動内容が多様になり活動時間も増加するため、学業や就職活動を控える学生、そもそもまちづくりや地域活性に興味がない人は継続されない状況であった。よって、3割以上の継続率に上げるためには、参加者募集から学年や専攻分野など絞ったものにする必要がある。しかし、運営スタッフを中心に参加者募集を行うため、スタッフの身の回りの学生が対象となり、参加する学生の属性はさまざまであるため、参加者募集でのスクリーニングは検討したい。「CMSP以外の地域で活動する割合」については、地域と学生のマッチングに必要な時間を十分に取れなかったことが挙げられる。具体的には、地域側の課題感やニーズのヒアリングを行う際に、市役所やNPOなどの市民団体との関係性の構築と、協働に十分な時間を割けなかった。また、今年度は地域外の地域の担い手を増やすために、地域コーディネーターと大学生との継続的なコミュニケーションを丁寧に行ったが、2021年夏季の解散から2022年春季の立ち上がりにかけての期間が短く、大学生一人一人と丁寧なマッチングを行えなかったことが考えられる。

運営学生スタッフとはプログラムの中で、地域との継続的な関わり方の選択肢を創り出すことを目的としたヒアリングや相談を実施した。プログラム外や現地入りとは別の機会、個々人のニーズにあった地域の取り組みに参加してもらったり、すでに現地に住んでいるメンバーと情報交換しながら、地域行事に参加してもらうよう促した。相談を通じて、地域に継続的に関わりたいと話す学生が多かった。具体的には、本プログラムのように若者を地域に連れてくるコーディネーター業をボランティアで行いたいとする学生や、第一次産業により深く関わりたいとする学生がおり、実際に定住を検討する学生もいた。学生のニーズに寄り添うと多様な選択肢が生まれることがわかった。しかし、5ヶ月間のプログラムでは現地入り設計や参加者募集、本番プログラムの設計と常に多忙であり、継続的な関わり方を実行に移す機会はプログラム終了後になるため、地域側と学生のマッチングに力を入れられる時間は少ない。地域コーディネーターが地域に足を運び、地域課題に対して取り組んでいる住民との関係を築き、交流を広げたり、実際に人手を要する場所には人を派遣したりと活動の幅を広げておくべきだったが、プログラム中には学生チームのマネジメントに時間を要し、本腰を入れて取り組めない状況であった。取り組んで見えてきた成果としては、2022年春季(2021/10~2022/3)プログラム後の面談やアンケート調査などは実施中だが、現在運営学生から3名が「第一次産業の担い手」「広田町への移住」「陸前高田市観光物産協会との接点づくり」など、CMSP以外で地域と関わりを持ち始めている。これらは既存の繋がりや、学生主体の関わりであったため、地域コーディネーター側の取り組みから生まれるマッチング数を増やしていきたい。

参加学生とは、自己理解とプログラムや地域により深く関わりたいという気持ちづくりを目的とした事前事後研修を実施した。内容としては、事前研修としてチームメンバー同士の対話の場を設け、自己理解と相互理解を進めながら心理的安全性の高いチームづくりを行い、また活動する地域への理解を深めるため、スタッフが準備した地域の概要や地域住民とのヒアリング内容などの事前情報の共有を行った。そして、事後研修では活動を振り返り、今後の自分らしい生き方や働き方に視点をおいて、価値観や理想の未来を思い描きながら、プログラムや地域との具体的な関わり方のきっかけとなるものを見つけた。

取り組んで見えてきた成果としては、夏季のプログラム(2021/4~2021/9)では約3割が運営学生スタッフを継続し、2021年度(2021/4~2022/3)のプログラム参加後アンケートでは、約9割が「継続して地域と関わりたい」と回答している。同時に、地域との関わりに求めることとして「地域の人とのコミュニケーションを深めたい」「より多くの人とのつながりを持ちたい」が多く挙げられた。よって、次年度のプログラムでは、多様な地域住民と交流できる機会を創出し、コミュニケーションが深まるように交流を設計したい。

同時に、今回活動している陸前高田市小友町、広田町、矢作町の3地区にとって価値ある変化があった。今年度は合計5チームがプログラムを実施し、地域に縁もゆかりも無い25名の運営学生スタッフが陸前高田市の関係人口として継続的に関わった。さらに、「地域のためになりたい」という運営学生スタッフの想いに共感した50名のプログラム参加学生が地域の新しい交流人口となった。2021年度のプログラムを通じて、学生スタッフはプログラムを終えてもなお活動地域へ足を運び、地域住民とオンラインなどで連絡を取り合うなど交流が続き、陸前高田市における継続的な関係人口となっている。本プログラムは運営する学生スタッフにとって、地域のためにを思い、地域住民と交流しながら、参加者を募りアクションを

行するため、地域との関わりを通して自分達の活動の意義を実感したり、自己成長の場として大きな原体験となったと思われる。また、陸前高田市の交流人口となったプログラム参加学生においては、一週間のみのプログラム参加だったにも関わらず、ほとんどの学生が継続して地域と関わりたいという反応があり、地域愛着の醸成に大きく貢献できた。今後の関係人口化に繋がっていくと考えられる。

3.次年度の活動について

今年度の活動を通じて、オンラインプログラムだったからこそ、さまざまな地域の学生が参加した。北海道から大阪の学生まで、今までの活動では関わるできなかった層の学生が陸前高田市に関わり始めている。また、地域住民側においても、今までは日中の仕事の合間をぬって活動に参加していただいていたこともあり高齢な方が多かったが、オンラインを通して若い世代の方との交流も行えた。地域おこし協力隊に勤めていた方や、地域の神楽を継承している地域の次世代を担う方との交流ができた。

今回の取り組みを通じて、「次期CMSP運営スタッフの割合を4割」にするために、参加者募集のタイミングで必要なスクリーニングを行う必要があると考える。今年度の活動では、学生との丁寧なコミュニケーション、継続的な面談を実施したが、そもそも参加している学生のニーズが多様であるため、地域との継続的な関わり方としてCMSP一つに比重を置くことは限界があると感じた。参加者の募集も運営学生スタッフの友人への募集であり、多様な学生が運営を行ってきたからこそ、継続に当たっても多様な選択肢が生まれていた。具体的には学年によってはゼミ活動や就職活動の関係で運営スタッフを継続しない選択をとる学生が一定数いる。「CMSP以外の地域で活動する割合2割」にするために、地域側の地域住民との関係を広げ、学生の関わりが両者にとって価値のある選択肢をつくり続けることが重要であるとする。今年度の活動では、地域コーディネーターの地域理解や関係構築が不足していたために、学生とのマッチングを行えなかったため、より地域に寄り添う必要がある。

以上のことから、今後は陸前高田市の中で、運営学生スタッフ以外にも継続的な関わり方の創出に力を入れるべきであり、地域の関係人口が生まれる土台をつくる上ではプログラム運営スタッフへの継続率を3割から4割に高めるのではなく、スタッフ以外の選択肢を増やす方向で目標値を設定した方が最適だと考える。プログラムへの関わりを通じて、自身のやりたいことや将来像を深ぼる中で、適切な関わり方はスタッフ以外の選択肢が多くあった方が、長期的に見て地域の担い手増加に向けた地域の関係人口が生まれる土台となるために必要である。実際、今回就活のタイミングであった学生が地域の団体と接点が生じた。他にも学生側の多様なニーズによって関わり方が生まれる可能性が高く、例えばSETの既存事業に関わる学生が出てきたり、第一次産業だけでなく、神楽や気仙大工などの伝統文化に深く関わり始める学生や、就職活動の一環で、陸前高田市の企業と接点ができたり、実際にインターンなどに参加してもらった流れができたと思う。その際のプランニングに関しては、現在移住しているメンバー中心にその都度検討したい。

同時に、陸前高田市の交流人口から関係人口になっていく若者を増やしていくために、参加者募集における広報に力を入れ、地域活性化やまちづくりに興味関心のある大学生へのアプローチし、地域への多様な創出に取り組みたい。募集時期なども検討したい。

□アウトプット2: 地域の中で地域外から来る学生と交流しCMSPで活動してくれる人が地域の中に増える状態

1.目指す成果と目標値について

「地域の中で地域外から来る学生と交流しCMSPで活動してくれる人が地域の中に増える状態」の実現に向けて、「CMSPの活動に関わる地域の人が、プログラム実施地域の人口の1割(小友町1925人、矢作町1372人: 令和3年3月31日時点総人口数)を超える」ことを目指した。

CMSPはコロナ前まで7年間広田町に継続的に交流の場を創り続け、地域住民800名と関わった。このような交流の結果、広田町内で地域住民主体の取り組みが2つ生まれている。広田町においては、今まで培ってきた地域住民との関係性を土台に、地域コミュニティの活性化及び、地域の課題解決に向けた新たな取り組みの創出を目指したい。また、今年度より休眠預金を活用し、陸前高田市小友町・矢作町の2地区に活動の場を広げ、継続的な交流の場の創出と、地域住民との関係性構築を目指した。

2.今年度の実績とその要因について(※ 1.実績値「進捗状況」の説明)

アウトプットの目標値として、2022年10月までに「CMSPの活動に関わる地域の人が、プログラム実施地域(現状広田、小友、矢作)の人口の1割を超える」と設定したが、現在「CMSPの活動に関わる地域の方は、広田町17人(=人口の0.5%)、小友町18人(=人口の0.2%)、矢作町17人(=人口の1.2%)」と計画より遅れている状況である(※人口は広田町約3000人、小友町約1900人、矢作町約1400人)。

要因として、当初設定した目標値はプログラム運営学生1名あたり3名の地域住民と新たな交流を行う前提での目標であったが、社会情勢と地域住民の安全性の観点より、現地入りではオンラインを活用した交流となり、地域での町歩き活動は行わずに、新たな交流に関しては地域住民の紹介を元に関係を広げたことにある。同時に、地域住民のカウントに関しては「本プログラムで関わった人」を直接的にヒアリングを行った人や、アクションを行った人と定義している。しかし、本プログラムは地域コミュニティの活性化に取り組むものであり、本プログラムで直接的に関わった人のみではなく、間接的に関わる人の影響を加味した活動を行っていくべきである。今年度はオンラインプログラムとなり、地域住民との交流の影響を測り

にくい状況ではあるが、次年度の活動の中では、関わる地域住民がどんなコミュニティに所属しているかの背景を踏まえ、交流の場の設計やアクションの設計を行う必要がある。

今年度は運営学生スタッフが現地入りという形で月に1度、実際に地域住民の方と交流を行った。ほぼ全ての現地入りがオンラインでの実施となったが、陸前高田市全体では52名の方と交流し、今年度から交流が始まった小友町では18名、矢作町では17名の地域住民と新たな交流の場を創り出した。このような交流を通じて、各地域の中のキープレイヤーとなる方と関係を築くことができ、継続的なヒアリングを元に合計17個のアクションをアウトプットした。キープレイヤーの中には、陸前高田市議会議員やコミュニティ推進協議会会長、陸前高田市交流推進センター管理人など、地域コミュニティに関して広く携わっている方と交流でき、大きな視点での地域理解に繋がった。また、漁協関係者の方や地域の伝統文化を継承されている方、移住者・Uターン者、若手の第一次産業の担い手の方と関わらせてもらい、地域の中の伝統文化や芸能、一次産業の現状について、深く関わる当事者の視点で地域理解を行った。

アクションとして、地域のためになる取り組みの創出として、地元産直のポスター作成やぶどう農家さんと一緒に地域内に継続した関係人口を生み出す企画の提案を行った。他にも、地域の魅力を外部に発信するオンラインイベントや、地域資源を活用したツアー体験の企画なども地域住民と協議しながら創出した。地域の方からは、学生が地域住民へ地域の課題や未来のことをヒアリングすることの価値を実感し、社会情勢により地域内での交流も少ない中で、オンラインによる交流自体を喜ばれる声があった。アクションとしては、企画の実行までには至らないものもあったが、今後、CMSPに参加した学生が地域に来た際に、地域住民と協働してアクションを実行できる関係が構築されたと思われる。今回のアクションの設計に関しても、直接関わる地域住民の方に対してのものが主になってしまったが、今後は直接関わる地域住民とその背景にあるコミュニティも加味してアクションの設計を行う必要がある。今年度も地域住民を介して新たな繋がりが生まれ、交流できた方も多い。今後はアクション実行後の伴走サポートにおいても、地域コミュニティの関係者と共に協議を重ねながら試行錯誤を重ね、地域住民を巻き込みながら、地域の中で学生と共に主体的に活動する人を増やしていくことを目指したい。

3.次年度の活動について

今年度の活動の中ではオンラインの可能性を実感する場面は多く、特に学生側への影響は大きかった。オンラインでのプログラムでも、地域住民との交流やアクションの実行を通じて地域への愛着が育まれ、継続的に関わりたいとする意識を醸成することはできた。また、地域側においても、普段オンラインツールを利用しない地域住民とも交流を通して心温まる場を共に過ごすことができた。同時にオンラインツールを活用した交流ができない地域住民も多いため、今後新たな関係構築やアクションの企画を行っていくためにも、地域側もオンラインに慣れていくことは重要かもしれない。

今年度はオンライン化でのアクションを地域コミュニティに向けて企画・実行はできなかったが、地域住民と具体的な企画を協議し、実行に向けての準備を進められいくことはできた。その過程で、地域住民との関係性の広がりや深まりがあり、「実際に現地に来的时候には協力したい」という声が多くあった。元々関係人口が希薄であった小友町や矢作町の中で、CMSPで生まれた活動に関わってくださる地域住民や、地域課題に深く関わるキープレイヤーとの関係が築かれ、着実に地域のためにを思って活動する人の繋がりは増えている。次年度では、このようなキープレイヤーとの関係から、地域コミュニティやネットワークに目を向けた交流の場の設計を行っていききたい。具体的には、コミュニティ推進協議会との連携や具体的なアクションの協議などを通じて、地域コミュニティに向けた取り組みにつなげたり、地域の伝統文化を継承されている方や若手の第一次産業の担い手の方達とは、実際に活動に参加しながら魅力発信や、身の回りの友人を巻き込んだ交流・関係人口の創出や交流のきっかけづくりなど、地域住民主体の取り組みと、地域外の若者を巻き込む取り組みを進めていきたい。

また、次年度は地域住民との交流の場の設計として、地域住民と、その背景にあるコミュニティとの関係性を可視化したり、地域の課題感やニーズなど蓄積・可視化を行い、地域住民主体の取り組みの創出に向けたプログラム設計を行っていききたい。今年度までは地域コーディネーターが地域住民と学生との交流の場を設けたり、新たな関係を創るための活動を行ってきたが、同時に学生チームのマネジメントなどの活動もあり、3地区での活動には時間的な制約が大きい。よって今後は地域住民と継続的にコミュニケーションを取りながら交流を重ね、地域住民主体の取り組みの創出に向けては、「町民ヒアリング担当」などを設け、地域課題の蓄積・可視化(※後述の「事業で直面している課題」に現時点で見えてきた課題を記載)を行いながら、地域住民と協働していく関わり方の創出および継続のための伴走に取り組んでいきたいと考える。

□アウトプット3: 地域内経済循環を生み出すための取り組みが、関係人口(地域外の若者)などと連携しながら生まれ始めている状態

1.目指す成果と目標値について

「地域内経済循環を生み出すための取り組みが、関係人口(地域外の若者)などと連携しながら生まれ始めている状態」の実現に向けて、「CMSPを通して生まれる、資金の流れを地域内で循環させる取り組み数が、広田で3つ以上生まれている」ことを目指した。

広田町では継続的な活動と地域住民との関係性の土台があり、すでにSET内で地域の持続性を高める活動としてコミュニティビジネスに取り組んでいる。広田町内での資金の巡りのほとんどは大手スーパーに流れてしまっている状況である。それも地域産業が衰退する中で、地域住民同士で買い支えができた地域コミュニティの繋がりが家族構成や就労形態の変化により希薄化しなくなっている。よって、広田町でのコミュニティビジネスでは、食を通じて地域コミュニティ内での資金の循

環だけでなく、地域住民同士の繋がり直しや、地域食材の消費や第一次産業との繋がり直しを目指している。これも、広田町への移住者が増えたことにより、地域の持続可能性の重要性和、実際に取り組みたいという意志を持った人が集まったからである。

今までの広田町での活動を踏まえ、交流の価値からさらにその先の価値を探求し、得られた結果を元に他地域へ波及させていくことをするべく、休眠預金を活用しながら今までCMSPを通じて行われてきたアクションの質をより高め、地域の持続性を高める取り組みの創出と、その取り組みに関わる移住者の増加を目指して活動を行なった。

2.今年度の実績とその要因について(※1.実績値「進捗状況」の説明)

アウトプットの目標値として、2022年10月までに「CMSPを通して生まれる、資金の流れを地域内で循環させる取り組み数」が、広田で3つ以上生まれている」と設定したが、現在「資金の流れを地域内で循環させる取り組み数は0」と計画より遅れている状況である。

広田町で取り組んでいるSETのコミュニティビジネスと連携し、実際に現地で取り組んでいるメンバーと協議しながら、本プログラムの運営学生スタッフの関わり方を模索した。地域住民とも継続的にヒアリングを行い、テーマを漁業に設定した。その後、地域の漁師を中心に交流を重ね、広田湾漁業協同組合とも接点をつくり、担当の職員にも地域の漁業に関するヒアリングを実施し、アクションを検討した。実際の声として、「昔は飯を食っていくためには漁師になるか大工になるかの二択しかなかった。学業よりも漁業が優先されていた」「しかし今は若者が外に流出しているし、子供が漁業に触れる機会もない。職業として漁師を選ぶ人はほとんどいない」「漁業は家族経営が基本、だが子どもに継がせること、地域の外に出ていくことをやめるとは言えない」「地域の中では地産地消は大事という声はあるが、実際値段の安いスーパーなどで買う」というものがあった。地域と漁業の密接な関わりの中には、若い頃から漁業を実感できたり、漁業が地域内で住民同士の助け合いの機会となっていたことがわかった。他にも、「漁師が漁協関係者とコミュニケーションが取れるのは出荷の時だけ、それ以外で話すことは減多にない」「学生と漁協との繋がりが作れたのはよかった。何かしらの変化が生まれることに期待したい」という声があり、近い存在であるかと思われた漁師と漁協に関して、目には見えない繋がり希薄化があるのではないかと考えられる。地元住民であっても、漁業との関わりが希薄化しているだけでなく、漁業関係者同士の繋がりに関する希薄化も進んでいることがわかった。地域住民だけでは生まれぬ繋がり直しの機会を、大学生とのプログラムの中で作り出せないか、検討することは重要である。

今年度の本番プログラムでは、合計4つのアクションを企画・実行した。しかし、実行したアクションのコミュニティビジネスとの接続や、地域内で持続可能な取り組みの創出には至っていない。要因としては、当初想定していた「地域課題に直接的にアプローチするアクションの設計」を行うためにテーマを設定したが、設定後に地域の漁師や漁協関係者へのヒアリングや、関係性の構築、実際の取り組みを企画・提案するまでの期間が短く、本番プログラムまでに十分なインプットを行えなかった。本来であればアクション実行までのプロセスで多様な地域住民を巻き込むことが、目的達成の上では重要であったが、現段階では取り組めていない。また、本プログラム自体も、SET内の既存の取り組みとの協働の仕方や、オンラインでアクション創出に対して十分に検討できていないことも課題であり、地域課題にアプローチするアクションの創出が行えなかった。元々あった地域住民と大学生の交流や、地域のためになるアクションの創出が、現地でされるものが前提にあったため、大学生が直接現地に足を運べない状況の中で、目指す成果に向けたプログラム設計の再検討が必要である。よって、オンラインでの交流であっても、アクションの実行期日が決まってしまう分、実行が目的になってしまわぬよう、プロセスの中で地域住民の巻き込みを設計していきたい。

3.次年度の活動について

今回のプログラムを通じてプログラム運営スタッフの学生が漁業に関心を持ち、実際に現地に足を運んで漁業に関わり始めている。他にも、プログラム運営スタッフから1名の移住者が決まっている。漁師の声としても、若者が漁業に触れる機会が全くないということもあったため、地域外の若者が漁業に触れ、実際にお手伝いなどで関わる学生が生まれていることは地域にとってとても大きな価値がある。また、漁業をテーマとしたプログラムを通じて、地域外の若者であり、今まで陸前高田市との関わりもなかったプログラム参加学生が、地元漁師や漁協関係者の方と交流し、実際に漁業に触れる機会を作れたことも大きな価値であった。

元々、地域の持続可能性を高めるお金が巡る取り組みが実装され、その担い手となる移住者が増える状態を目指すとともに、最終的には地域の課題の解決に向けて地域住民主体のコミュニティが形成されることが目的にあった。また、お金の巡る取り組みの創出としてコミュニティビジネスを置いていたが、改めて資金の巡りだけでなく、地域住民同士の交流や、地元食材や産業などの地域資源との関わりを再構築していくことが重要であると考え。よって、今回のような地域外の若者が産業に携わり始める過程に、地域住民を巻き込みながら、その可能性や価値を共有し合う場の設計や、地域外に向けての発信だけでなく、地域内での発信として、大学生の活動から住民同士、地域資源との繋がり直しをより行っていきたい。

そのためにも、実際に地域の中で取り組まれているものや行事に参加する機会を創出したり、地域内で漁業をテーマにした住民同士の交流の場の創出、すでに現地に移住しているメンバーと交流の場を作り、実際に地域の産業に触れるということはどういうものかについて対話を重ね、地域理解を進めていくことが重要であると考え。そうして、地域内のキープレイヤーと関係を深めながら、実際の取り組みに関わらせてもらったり、地域住民を巻き込んだ場の設計にしたり、地域外の大学生が地域の担い手となる選択肢を増やし続け、定住人口の創出に繋げていきたい。

■今後の活動における可能性

今年度の事業を通して、今後も継続的に地域へ関わりたいという交流・関係人口を生み出し続けられている。少子高齢化が進み人口が減少し続ける陸前高田市において、地域への愛着をもつ若者が増え、実際に地域で活動に取り組み続けることは希望である。将来的には、本プログラムが陸前高田市との多様な関わり方を創出し、地域のためになりたいと志す地域の担い手が増え続ける地域・社会を実現したい。

また、地域側においても、大学生との関わりを通じて一人では実現が不可能であったり、そもそも生まれなかったアイデアが形となって実現するきっかけになっていると考える。元々は地域行事や伝統文化が地域住民同士で助け合い残してきたものも無くなる中で、地域行事や伝統文化の復活や新たな取り組みが生まれることの意義は大きい。将来的には、地域のためになる活動を地域住民が主体となって実行し、その継続には地域外の学生も加わり、貢献していくような地域の雰囲気づくりを行い、地域コミュニティが活性化して住む人が豊かになる地域を実現したい。

6. 新型コロナウイルス感染拡大に対して、事業活動を行う際に工夫した点

■学生の継続的な伴走

プログラムの運営が全てオンラインとなった影響により、運営学生スタッフのモチベーション維持が難しい状況であった。活動のほとんどは画面上で行われ、自分達の活動の意義や価値を感じる機会が少ないまま、現地入りでの地域住民とのコミュニケーションや、参加者募集による身近な大学生との丁寧なコミュニケーションに疲弊してしまう学生も多かった。

本プログラムでは、地域コーディネーターによる大学生一人ひとりに寄り添ったコミュニケーションを丁寧に取り、「大学生自身のやりたいこと」や「将来像」を尊重した運営を心掛けた。本来、対象である地域や地域住民にとって直接的ではない活動ではあったが、未来の地域の担い手づくりにおいては重要であると考え、コーディネーターが現地へいけないタイミングを利用し、丁寧なコミュニケーションと、大学生の持続可能なプログラム運営を行った。結果的には、オンラインでのプログラムだったが、運営学生スタッフの成長は大きく、スタッフの純粋な想いに共感し集まった参加学生のプログラム満足度も高く、「関わった地域に今後も継続して関わりたい」という声が多かった。

■オンラインの活用による地域住民との交流

現地での町歩きや町民との交流を通して活動地域の生活感や住民との顔の見えるコミュニケーションをオンラインにて実施した。

地域を知ってもらう機械としての町歩きでは、移動は主に自動車を使用して地域住民と直接交流しないよう配慮した。その際、オンラインによる画面揺れにより体調不良を訴える学生が多数出たため、手振れを補正する「スマートフォン用スタビライザー」を購入し改善を図った。結果、画面越しに見ている学生へのストレスを軽減し、体調不良を訴える学生は大幅に減った。

また、町民との交流は、地域コーディネーター(広田町在住)が感染症対策を講じた上で地域住民宅へ直接訪問し、オンライン会議ツール「ZOOM」などを使用して地域外の学生と町民との交流の場を設けた。地域コーディネーターが直接訪問することに対して抵抗を感じる住民には、広い空間や野外で交流するなど、お互いにとって安心して事業に参加していただく環境づくりを徹底した。

また、一度交流した住民には積極的に電話番号やメッセージツール(LINE、Messenger等)の連絡先を交換し、遠隔でのコミュニケーションを可能とした交流の工夫を行った。これにより、時間や場所にとらわれず、気軽に連絡できる関係ができ、運営学生スタッフと地域住民の心理的な距離が近くなった。

■オンライン環境ならではのアクション実行

従来、本番プログラムでの一週間では活動地域でのフィールドワークや住民との交流を通して、学生主体のまちづくりアクションを町民を巻き込みながら行ってきた。しかし、オンラインでの交流に限定され、「地域住民を巻き込む」ことが困難になった。

そこで、オンライン環境だからこそ生み出せる成果物の作成やにフォーカスし、広告動画やWeb資料を作成、「住民の想い」と「学生のアイデア」の掛け合わせによって生まれた成果物により、町の未来につながるきっかけ作りを行った。他にも、実際に現地ですぐに実行に移せるようなアクションの設計・提案を行い、地域の魅力発信のためのツアーや1日限定古民家カフェなどの案が住民と協議された。住民の反応としても、地域資源を活用できそう、実際に取り組む際に協力したいという声が上がった。

③ 広報に関する報告

シンボルマークの使用状況

- 自団体のウェブサイトに表示している 広報制作物に表示している
 報告書に表示している イベント実施時に表示している その他
→「その他」を選択した場合は記載してください(自由記述):
SETの事務所で、入口の扉にステッカーを貼る

広報

1.メディア掲載(TV・ラジオ・新聞・雑誌・WEB等)

運営学生スタッフは「参加者募集」の際に各個人がSNS等で以下の資料と一緒に発信を行った
本プログラムのHP: <http://1week.set-change-maker-program.com>
本プログラムのInstagram: https://www.instagram.com/cmsp_2011/

2.広報制作物等

特になし

3.報告書等

特になし

4.イベント開催等(シンポジウム、フォーラム等)

「参加者募集」の際に、無料説明会というプログラムの概要や地域の紹介を行い、陸前高田市の「交流人口」を生み出す機会を作った

- 広田町:

https://docs.google.com/presentation/d/1KLOoEyohdNjA43b8KCNhcBZkdoQJtK6_dg2UcqW8E5o/edit#slide=id.ge266748c2a_29_0

- 小友町:

https://docs.google.com/presentation/d/1YSQSxRzWNreZkLzLkfSCXS-uySDMh0qAfcNXriAHLmY/edit#slide=id.ge266748c2a_29_0

- 矢作町:

<https://docs.google.com/presentation/d/14yd1jwbtxAkmme93B9CtRz3qV-FDNx2H2jfrxYjlrNg/edit?pli=1#slide=id.p>

④ 規程類の整備に関する報告

1. 事業期間に整備が求められている規程類の整備は完了しましたか。

- 完了 整備中

2. 整備が完了した規程類をwebサイト上で広く一般公開していますか。

- 全て公開した 一部未公開 未公開

→「一部未公開」「未公開」を選択した場合の理由と公開予定日:現在公開のため、整備中(公開予定日5/2)

3. 変更があった規程類に関して資金分配団体に報告しましたか。

- はい いいえ

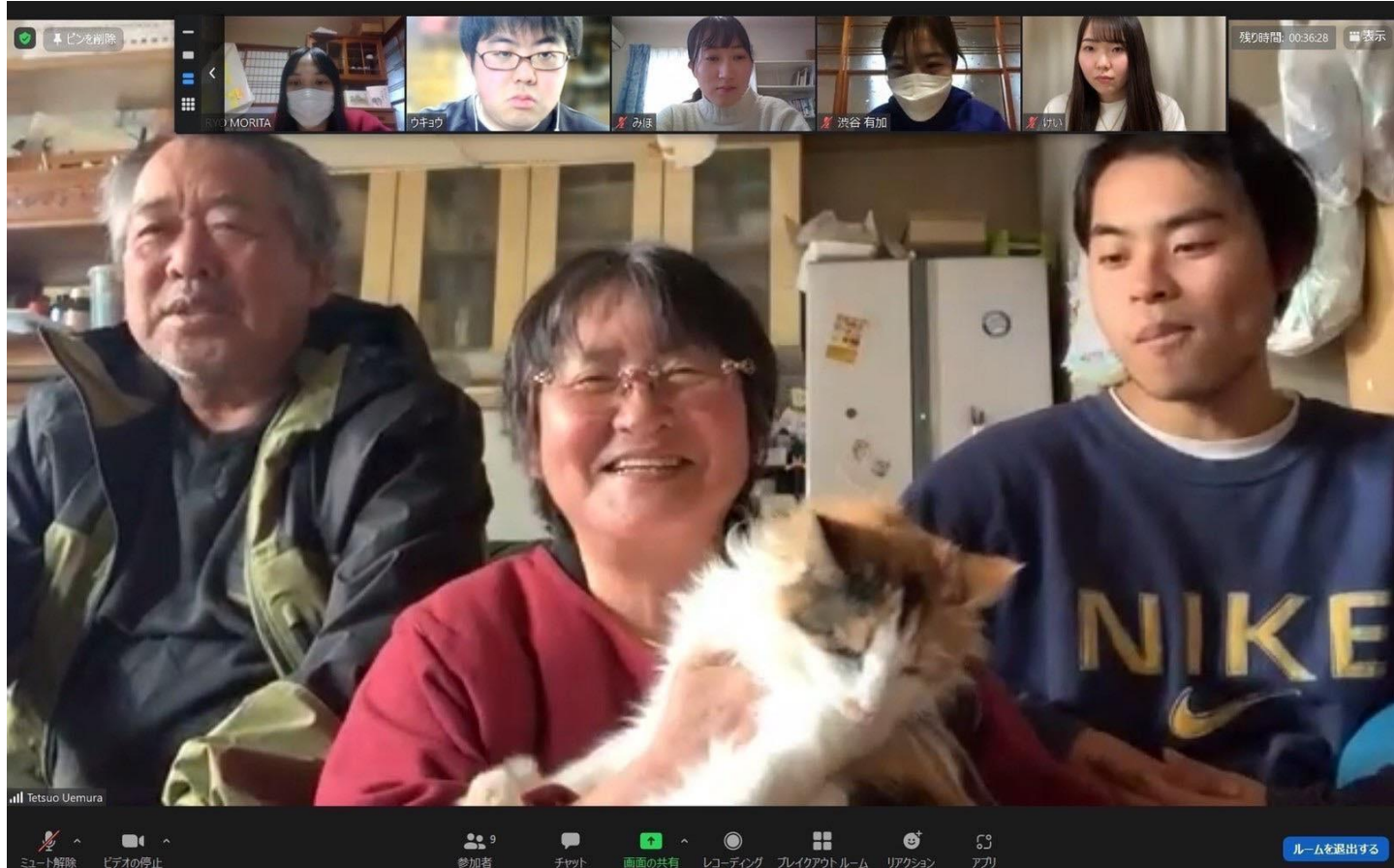
→「いいえ」を選択した場合の理由:

⑤ ガバナンス・コンプライアンスに関する報告

1. 社員総会、理事会、評議会は定款の定める通りに開催されていますか。
<input checked="" type="checkbox"/> はい <input type="checkbox"/> いいえ →「いいえ」を選択した場合の理由:
2. 内部通報制度は整備されていますか。
<input checked="" type="checkbox"/> はい <input type="checkbox"/> いいえ →「はい」の場合の設置方法(複数選択可): <input checked="" type="checkbox"/> 内部に窓口を設置 <input type="checkbox"/> 外部に窓口を設置 <input type="checkbox"/> JANPIAの窓口を利用
3. 利益相反防止のための自己申告を定期的に行っていますか。
<input checked="" type="checkbox"/> はい <input type="checkbox"/> いいえ →「いいえ」を選択した場合の理由:
4. 関連する規程の定めどおり情報公開を行っていますか。
<input checked="" type="checkbox"/> はい <input type="checkbox"/> いいえ →「いいえ」を選択した場合の理由:
5. コンプライアンス委員会は定期的を開催されていますか。
<input type="checkbox"/> はい <input checked="" type="checkbox"/> いいえ →「いいえ」を選択した場合の理由: 規定を作成の上、運用のための整備中のため
6. 報告年度の内部監査又は外部監査を実施予定ですか。(実施済みの場合含む)
<input checked="" type="checkbox"/> 内部監査を実施 <input type="checkbox"/> 外部監査を実施 <input type="checkbox"/> 実施する予定がない →「実施する予定がない」を選択した場合の理由:

添付資料

活動の写真(画像データは1枚2MG以下、3~4枚程度)





みゆっちの画面を表示しています ビューオプション

表示

Who (誰と?)

今回は「まきごさん」「ゆうとさん」にフォーカス当てています

「まきごさんの手料理が食べたい」「ゆうとさんとお友達になりたい」という想いが強くありました！

今後は更に参加する人数を増やしていきたい！！

賀野賀一	tsubasa	はせがわみどり	セナ
ななか	あおと	りくと	みゆっち
ゆず	さいとう かく	しゅうさく	あんちゃん
ころちゃん	はな	ななみん	よしはらなおや

賀一 賀野

賀一 賀野

ミュート解除 ビデオの停止 セキュリティ 参加者 17 チャット 画面の共有 レコーディング ライブ文字起こし ブレイクアウト ルーム リアクション アプリ 詳細 退出